

組織学会通信

No.97

2025. 9. 20

【大会関係】

2025 年度組織学会研究発表大会 開催校挨拶

2025 年度組織学会研究発表大会は、2025 年 6 月 21 日（土）および 22 日（日）の 2 日間にわたり、九州大学伊都キャンパスにおいて開催されました。九州大学での開催は、2008 年度年次大会以来です。2018 年に移転が完了した伊都キャンパスでは、初の全国大会となりました。大会参加登録者数は 356 名に及び、懇親会への参加者は 185 名に達しました。

本大会は、A 会場から F 会場までの 6 つの平行セッションを用意しました。大会初日の午前中は、大学院生セッションで 26 本の研究発表が、午後からは研究発表セッションとなり 2 日間で 56 本の研究報告がありました。いずれの会場も最新の研究成果に対して出席者の皆様から組織学会らしい活発な議論が展開されました。

また、初日の午後には、高宮賞授賞式ならびに受賞者セッションが行われました。浅羽茂先生（早稲田大学）の司会のもと、著書部門 1 件、論文部門 2 件の受賞者が発表されました。青島矢一会長（一橋大学）より、著書部門の森永雄太先生（早稲田大学）、論文部門の横田一貴先生（横浜国立大学）、中園宏幸先生（関西大学）と長谷部弘道先生（日本大学）に加え、出版社表彰として千倉書房様に表彰盾が授与されました。その後の学会賞受賞者セッションでは、森永先生、横田先生、中園先生、長谷部先生より、受賞作の概要、研究動機や研究経緯、今後の展望についてご講演をいただきました。

総会終了後の懇親会は、キャンパス内の食堂で開催しました。都心から離れた場所にあるキャンパスですので、懇親会の参加率が気になるところでしたが、多くの会員の皆様にご参加いただき、熱気に満ちた懇親会となりました。キャンパスからは最寄り駅の九大学研都市駅まで送迎バスを手配しましたが、皆さまのご協力で混乱なく移動することが出来ました。

会場となった伊都キャンパスは、福岡市郊外に位置し、会員の皆様には何かとご不便をおかけしましたが、多くの皆様にご参加いただき、大会を盛り上げて頂いたことに感謝申し上げます。本大会は、新キャンパスでの初の組織学会開催ということで、大会実行委員一同、張り切って皆さまをお迎えする準備に取り組んでまいりました。学生スタッフの頑張りや成長は、予想外（と言っては学生に失礼ですが）の収穫でした。最後になりました

が、大会開催にあたり多大なるご支援を頂きました大会委員会の先生方、そして学会事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。

2025 年度組織学会研究発表大会実行委員長 目代武史
実行委員会・開催校一同

【2】2026 年度組織学会年次大会のお知らせ

2026 年度年次大会（青山学院大学）を、以下の通りに開催いたします。多くの会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日 時： 2025 年 9 月 20 日（土）・21 日（日）

開催校： 青山学院大学 青山キャンパス

大会テーマ：「VUCA の時代と組織の可能性－時間、空間とモード」

組織が存在する意味を研究対象とする組織論は、100 年以上にわたる、組織、戦略、組織行動などさまざまな分野の実証研究から、多くの知見と知識を蓄積し、その豊かな英知はさまざまなマネジメントに応用されてきました。デジタル化やグローバル化の進展により、近年、経営組織としての企業の組織マネジメントは大きく変わりつつあります。このような大きな転換期に臨み、本大会の開催校として、さらなる組織論の飛躍へ向け、ご参加いただく会員の皆様が、積み上げられた諸理論、諸概念、パラダイムなどを、色々なアプローチから広く再検討しながら、デジタル時代に価値を生み出す組織について、新たな視点と応用の可能性を求め、深く考察する機会を提供させていただければと願っています。

青山学院ビジネススクールと青山学院大学経営学部の有志の協力により、インタラクティブな学会を目指す今大会のプログラムは、以下の4部構成となっています。

- ① 13 のテーマセッション（ランチョン・セッション含む）
- ② 3 つの特別セッション（基調講演、経営者講演、起業家パネル）
- ③ 12 の国際セッション（英語による研究発表セッション）
- ④ 交流会

まず、VUCA（volatility, uncertainty, complexity, ambiguity）の時代における価値創造に向けた組織のあり方について、開催校として、8 つのセッションを用意させていただきました。その中には、研究者とマネジメントの実務家が、学術と現場の接点から議論を戦わせる人事、組織のデジタル化、地方創生に関する3つのセッション、異なる学術領域のメンバーからなるアントレプレナーシップやエコシステムに関する英語でのパネル・セッション、コミュニティと知識の研究発表、そして、イノベーション・マネジメントに関す

る英語での研究発表が含まれています。また、大会委員会による 5 つのセッションでは、組織学会の伝統を踏まえた、多様なテーマセッションが予定されており、『組織科学』60 周年を記念した企画や、若手研究者のキャリアに関するセッションも用意されています。

次に、開催校からの特別セッションとして、9 月 20 日（土）のプログラムでは、第一に、University of California-Berkeley ビジネススクール及び大学院社会学部の Heather A. Haveman 教授による基調講演（keynote speech）をご堪能いただけます。第二に、経営者講演として、開催校が立地する渋谷・青山周辺の都市インフラの開発と文化創造を主導する、東急株式会社から専務執行役員の高橋俊之氏に、その歴史と将来像についてご講演いただきます。そして、9 月 21 日（日）には株式会社 Sprocket 代表取締役の深田浩嗣氏、SATORI 株式会社代表取締役の植山浩介氏をお迎えし、スタートアップからの成長企業ならではの組織マネジメントの現場について対談形式でお話いただきます。

また、昨年度より始まった、国際的な研究発表の場としての学会の機能を強化すべく、英語セッションが国際委員会により開催されます。Call for Paper 方式で公募され、査読審査により選り抜かれた計 36 本の研究発表が、12 のテーマに分かれ行われます。大会テーマに沿ったセッションも含まれますが、これらはより一般的な組織・戦略に関する伝統的トピックや、フロンティアを求める先端的な組織研究まで、広範なテーマで構成されています。

最後に、9 月 20 日（土）の夕方に、主催校として、1 時間ほどの交流会を開催いたします。懇親会という形式ではなく、大会参加者であればどなたでも無料で参加可能な、気軽なインタラクションの場と位置付けたもので、多くの会員の皆様にご参加いただき、ネットワーキングの機会として、メンバーやゲストとの交流を楽しんでいただければ幸いです。

会場となる青山キャンパスは、東京の渋谷駅と表参道駅の間という、さまざまなアクセスに恵まれた立地にあります。当日のランチの弁当販売は行いませんが、キャンパスでも人気の 1 階にある学生食堂は土曜日開店しており、また、周辺には多くの飲食店がありますので、ご友人と青山のレストランの文化をお楽しみいただければ幸いです。夜の部は、おしゃれな渋谷・青山・表参道エリア、あるいは、恵比寿、代官山、六本木まで足を延ばせば、東京の先端ビジネスの今を、皆様に肌感覚でご理解いただける機会になるのではと期待しています。

多くの会員の皆様のお役に立てるよう、日々進行形で準備を進めており、プログラムを含め、情報は追って引き続きアップデートさせていただきます。夏の猛暑も終わり、秋の気配が感じられるころ、組織学会本大会に是非ご参加ください。会員の皆様を青山キャンパスでお迎えできることを有志一同心待ちにいたしております。

【3】2026 年度組織学会研究発表大会のお知らせ

2026 年度組織学会研究発表大会は、2026 年 6 月 20 日(土)、21 日(日)に、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにおいて開催される予定です。

関西学院大学は今年創立 136 周年を迎えるのですが、実は組織学会の大会の開催は今回初めてとなります。われわれ実行委員会のメンバーも大変驚いており、またようやく学会員のみなさまを西宮上ヶ原キャンパスにお迎えできますことを大変光栄に存じております。

研究発表大会は、院生セッションならびに研究発表セッションともに自由論題による発表が中心となります。年明けには報告募集のご案内をいたしますので、みなさまの研究成果を奮ってご披露いただきたく、研究報告へのご応募をお願い申し上げます。

参加されるみなさまにご満足いただけるような大会となるよう、実行委員会一同、できるだけの努力をして参る所存でございます。有意義な大会になりますよう、ご理解とご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

2026 年度組織学会研究発表大会（関西学院大学）実行委員会一同

【4】ドクトラル・コンソーシアムについて

6 月の研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会が選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」（ドクコン）にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクコンはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクコンご参加の意思確認をいたします。ドクコン参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクコンは、いわゆる Paper Development Session です。ドクコン参加者は、全員が『組織科学』仕様の(投稿規定に則った)論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクコン提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクコン終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。

そして、ドクコン開催日の夜（あるいは翌日の夜）には、ドクコン参加者のご希望にできるだけ沿えるよう、数人のシニアの学会員をお呼びして、懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手がかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

大会自体がコロナ前の対面開催に回帰したことを受けて、ドクコンについても、対面開催へと戻すことにいたしました。オンラインではできなかった、若手研究者とオーガナイザーの先生方とのアイディアと熱量の交換に期待したいと思います。

すでにご存知かと思いますが、一昨年度の大会より、ドクコン参加者を「組織学会研究発表大会優秀報告者」と称することが決まっております。ドクコンに参加することで研究をブラッシュアップする権利を得ると同時に、参加した時点で、大会で報告を行った大学院生報告者の中でも、特に優れた報告者と学会に認められた、ということを意味します。学会として賞状等を授与するということは致しませんが、参加者の皆様は、自身が「優秀報告者」であることを履歴書等にお書きいただくことが可能になります。ドクコンに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクコン「インビテーション・レター」への最初の一步となります。

大会委員会

【 2025 年度 組織学会高宮賞 】

2025 年度組織学会高宮賞は、以下の通り決定いたしました。

【著書部門】

受賞者：森永 雄太（早稲田大学）

著書名：『ジョブクラフティングのマネジメント』

【論文部門】

受賞者：横田 一貴（横浜国立大学）

論文名：「戦略的撤退がもたらす社内知識の移転

－雇用維持のための配置転換とシナジーの創発－」

受賞者：中園 宏幸（関西大学）・長谷部 弘道（日本大学）

論文名：「歴史を資源として使う工夫：

パナソニックの歴代社史にみる公共性の獲得過程」

2025 年度組織学会高宮賞 審査報告

審査委員長	若林 直樹
担当評議員	浅羽 茂
	沼上 幹
	浅川 和宏

2025 年度の組織学会高宮賞は、以下に示すとおり、著作部門 1 点、論文部門 2 点で計 3 点が選出されました。

著書部門

森永 雄太

『ジョブ・クラフティングのマネジメント』千倉書房（2023 年 10 月）

論文部門

横田 一貴

「戦略的撤退がもたらす社内知識の移転」

（『組織科学』2024 年, Vol.57 No.4, P87-100）。

中園 宏幸、長谷部 弘道

「歴史を資源として使う工夫：パナソニックの歴代社史にみる公共性の獲得過程」

（『組織科学』2024 年, Vol.57 No.4, 101-114）。

今年度受賞された皆さんには心からお慶びを申し上げます。慣例に従い、審査プロセスと受賞作品の評価について簡単にご紹介させていただきたいと思います。

最初に審査プロセスですが、今回、審査の対象となったのは、著書部門 2 点、論文部門 10 点がそれぞれ審査対象になりました。それに対して、10 名の審査委員が、1 つの著書・論文について 3 名ずつ担当して、評価を行いました。その評価を持ち寄りまして、3 月 20 日に開催されました学会賞委員会で協議いたしました。その結果として、上の 3 点を受賞にふさわしい作品として全会一致で決定しました。

次に各作品の評価について述べさせていただきたいと思います。

まず著書部門の森永氏の「ジョブ・クラフティングのマネジメント」についてです。近

年、組織行動論の分野においては、組織学会をはじめとして多くの研究者が、社員による自発的な職務設計の行動に関して、「ジョブ・クラフティング」という新たな研究視点に関心を集め研究がされてきております。委員会での評価では、この著書は、近年の自発的な職務設計のレビューから自発的な調整行動であるジョブ・クラフティングについて、個人差要因、職務特性要因についての従来の議論を発展させるだけではなく、その内発性を尊重しつつ、マネジメントしていくメカニズムと要因に関する議論を新たに構築されました。森永氏は、この研究テーマの研究リーダーとしてジョブ・クラフティングの促進や人事施策等のマネジメントまで含めた議論が出来るようにする独自の成果を生み出しております。さらに、実証分析手法に関しても、アンケート調査や日誌法による調査も行い、独自の高い成果を出しております。今後のジョブ・クラフティング研究の基準となる研究書であると評価は一致いたしました。

次に論文部門ですが、2つを優秀作品として選出させていただきました。

第一に、横田氏の「戦略的撤退がもたらす社内知識の移転」です。この論文は、企業の戦略的撤退という行動によって、技術的知識が、当該組織の内部から失われるのか、それとも他の事業部で活用されるのか」という明確かつ独創的なリサーチ・クエスチョンを提示しました。常識的な議論では、戦略的撤退は、社内知識のリストラに終わるのであろうという見立てになると思います。しかし、本論文は、場合によっては、戦略的撤退でも社内知識の移転と活用につながる可能性について理論的な枠組を示しただけではなく、三菱電機の社内特許の活用状況について特許分析についてのパネルデータ分析でそうした傾向が見られることを示しました。この論文は、戦略的撤退がもたらす影響とそのコントロールという戦略論上の問題意識との関連を明確に持ち、企業の戦略の策定・実行に関して独自の実務的示唆を与える論文として高く評価されました。

次に、歴史的事例分析の新たな研究スタイルとして、高く評価されたのが、中園氏と長谷部氏が共著された「歴史を資源として使う工夫」という論文です。この論文は、経営史、戦略論、組織論でも、代表的な事例として議論されてきたパナソニックの歴史について、「レトリカル・ヒストリー」という新たな歴史分析の手法を導入しながら独自の成果を上げたものです。この分析手法に従い、企業が、伝説的な経営者と企業の歴史を、独自の歴史的な経営資源として活用しているという独自のインサイトを生み出している点が高く評価されました。ことに社史室が、その時々経営者と共に、松下幸之助についての、神格化や脱神格化を行いながら、価値評価や転回を進める戦略的行動の動態を示したことが新たな事例分析の方向性を示すと評価されました。

今回の受賞作は、現在の組織論研究のスタンダードを示していると評価されました。ジョブ・クラフティングや、社内での知識の再配分、社史の戦略的資源としての利用という異なるテーマを扱っているに関わらず、新たな理論的動向の検討を行い、それに基づく新

たな組織現象に対する見方を提示し、独自のリサーチ・クエスチョンを構築し、そしてそれに対応する革新的な実証研究手法～新たな知見を導いている点が共通しております。さらには、分析のために分析にとどまらず、経営行動としての実践とその影響について実務的な示唆も導こうとしている点も非常に評価できます。つまり自発的な職務設計の促進、戦略的撤退による社内知識の活用、社史の再解釈や価値評価の転換による企業行動の新たな共通解釈の形成と実践的なインプリケーションを提示している点も高く評価できます。

他方で、今後の発展を進める上ではさらなる追加検証も必要との反省的な議論もありました。いずれの研究も、実務的インプリケーションを強く意識しておりますが、その成果の普遍性を高めるには、現象に対する環境や経路依存性の影響や、さらには主体の再帰性という課題に関する追加的な検討も必要と思われます。例えば、多くの社員のジョブ・クラフティングを、一定の方向に誘導可能と一般化できるかについての追加検証も必要でしょう。そして自発的職務設計は、そもそも自分の行為の反省の上に再展開するというプロセスも検討すべきでしょう。戦略的撤退を行う企業の社内知識の再配分の成果の研究についても、当時の経営環境の独自の影響もあり普遍的なものなのか、さらには戦略遂行者からすると意図せざる結果だったかも検討する必要があります。社史の歴史的資源の活用については、異なる時代での異なる経営者が行う別々の再解釈なので、時代や環境の影響は無視できないでしょう。そして次の時代の経営者は、前代の経営者の再解釈を出発点として新たな再解釈を転回していると思われます。ただ、この4人の方々は、こうした反省的な検討も含めて今後も学会をリードする研究をされていかれることと思っております。

最後に、今年度は、特に論文部門では、編集委員会の先生方のご努力もあり、若手の候補作が10点と豊作となりました。また、著書部門も大変現代的な意義のある二つの書籍が候補作としてされてきました。その中で、学会賞委員の先生方には、一作一作丁寧にご批評いただきました。こうした取組の積み重ねが、今後の組織学会を創造的な研究コミュニティとして発展させられると思われます。関係の各先生方にあらためて感謝させていただきます。

審査委員長 若林 直樹

2025年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶

—著書部門—

『ジョブ・クラフティングのマネジメント』

(千倉書房 刊)

早稲田大学 森永 雄太

このたびは、組織学会高宮賞（著書部門）という大変光栄な賞を頂き、心より

御礼申し上げます。本書は、2007 年の研究発表大会（於京都産業大学）を端緒として長年取り組んできた研究の集大成です。私にとって特別な場である組織学会で評価していただけたことは、大きな励みであり、身に余る光栄です。

本書では、大きく分けて2つの問いを扱っています。第1部では、「組織が従業員の仕事のやりがいを引き出すにはどのような職務設計を行えばよいのか」という問いに関して、循環的な職務設計プロセスの有効性とそれを実現するためのジョブ・クラフティングの重要性を主張しています。第2部では、「自発的行動であるジョブ・クラフティングを組織はどのようにマネジメントすればよいのか」という問いに答えるための2種類の質問票調査を実施しています。詳しくは書籍をお読みいただきたいのですが、本書では2種類の人事施策とインクルーシブ・リーダーシップが、特定のタイプのジョブ・クラフティングに与える影響を検討しています。

書籍の執筆プロセスは険しいものでしたが、充実した人生の記憶でもあります。2022 年 12 月から 2023 年 1 月にかけてオーストラリアに滞在していた私は、当地で第2部の実証パートを概ね書き上げました。今でも私のパソコンには、分析や執筆を行った都市にちなんだ「東京編」「メルボルン編」「シドニー編」のフォルダ名が並んでいます。最終的に、メルボルンで分析した結果が第6章、シドニーで仕上げた分析結果が第7章として、本書に組み込まれています。書籍を読み返すたびに、それぞれの街のホテルの机や部屋から見える景色が思い浮かぶのは、今となってはとても幸せなことでもあります。特に、メルボルン滞在中、何度も足を運んだ州立図書館。美しいシンメトリーのデザイン、高い天井、歴史を感じさせる机。観光客の出入りで多少ざわついているのですが、そんな中だからこそ「よし、集中して書くぞ」と思わせる、空気がとても好きでした。ホテルの部屋では思いつかなかった言い回しが、その空間では不思議と浮かんできた、ということもありました。今この文章を書きながら、あの図書館で「いつかこのエピソードのことをエッセイにでも書くぞ」と思っていたことを思い出しています。集中して執筆することを許していただいた当時の同僚の先生方や家族にも感謝したいと思います。

受賞のお知らせと前後して、新たな場所で研究・教育に従事する機会をいただきました。今後も、働き手がいきいきと働けるマネジメントの探求とそれを実現するためのリーダーシップ教育に力を尽くしてまいります。この度は誠にありがとうございました。

－論文部門－

「戦略的撤退がもたらす社内知識の移転

－雇用維持のための配置転換とシナジーの創発－

（『組織科学』第57巻第4号）

横田 一貴（横浜国立大学）

この度は、高宮賞論文部門に選出していただき、ありがとうございます。自分には身に余る賞だと感じて恐縮する気持ちが強いのですが、少なくない方々に私の論文をお読みいただいたこと、そして評価していただいたことを大変光栄に思います。

学会でのスピーチでは触れられませんでしたでしたが、今回賞を頂いた論文は私一人の力によるものではなく、組織科学のレビュープロセスで磨いていただいたところが大きいと感じております。査読者の先生方からは、数多くの的確なアドバイスと激励のお言葉を頂戴いたしました。またエディターの先生には非常に丁寧なディレクションをしていただき、迷うことなく修正作業に取り組むことができました。賞そのものではなく、私の未熟な原稿を、少しでもよい論文に近付けていくためにご助力いただいた多くの先生方とのやり取りそのものが、今後の財産になるのだと思います。

研究者としてもまだまだ未熟な私が、このように学会を通じて他者の研究をご支援することができるような立派な研究者に成れる日が来るのかと思うと、あまり自信はありません。それでも、ふとした時に今回の論文のコメント・ペーパーを読み返しては、この初心を忘れないようにしていきたいと思います。

これからも他の研究者の皆さまがどのようなご研究をされているのか、皆さまが覚えた知的興奮を知っていけることを、心の底から楽しみにしております。また私自身も、自分がどのような論点に血沸き肉躍るような知的興奮を感じ取ったのかを、論文や学会発表を通じて発信していきたいと思います。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど是非よろしくお願い申し上げます。

「歴史を資源として使う工夫：

パナソニックの歴代社史にみる公共性の獲得過程」

（『組織科学』第57巻第4号）

関西大学 中園宏幸

日本大学 長谷部弘道

高宮賞に選出していただき、ありがとうございました。思いもしないことも、時には起こるのだなと実感しております。受賞者セッションを終えてもなお、感慨

深いものです。鹿児島出身のナカゾノとしては憧れの九州大学にて、経営学研究者のナカゾノとしては憧れの組織学会にて、まさか表彰していただけるなんて、やはり思いもしないことでした。

「しっかり研究していれば、誰かが必ずみてくれているから」とお世話になっている先輩に言われたことがあります。誰かが本当にみてくれているのであれば良いのですが、それはじぶんにはわかりません。陰で見守ってくださっている姿はわからないのです。学位を取り、一応は「一人前」になったときに、はたしてじぶんは本当にしっかり研究ができているのか、わからなくなることもあります。自信を持って投稿した論文が見るも無惨にリジェクトされると自信も失います。そのようなことを考えたりしていると、「誰かが必ずみてくれているから」では、むしろ不安を強めてしまうことさえあります。

何とも言い表せない不安を払拭するためには、多様なコミュニケーションの機会が必要だと思っています。孤独の感覚は非常に良くない。

長谷部先生は、みてくれている誰かでした。2016 年に出版された論文がきっかけとなり会話がはじまりました。「しっかり研究していれば、誰かが必ずみてくれているから」、その言葉のとおり、共同研究をはじめることになりました。思いもしないことは、時には起こるものです。

長谷部先生との共同研究では、バーナード的な協働システムを上手く構築することができました。「共通の目的」「コミュニケーション」「貢献意欲」それぞれを確認しあいながら、それらをメンテナンスしていくプロセスそのものでした。組織論の古典は共同研究にも役に立ちました。

専門領域も出身校も異なり、もちろん師弟の関係もないわたしたちが上手く共同研究を進めることができたのは、先の協働システムに加えて、互いにリスペクトすること、そしてご自愛を優先することを大切にしていたからだと思います。リスペクトは、よりよい成果に向けた相互期待と尊重です。ご自愛は、暮らしと健康を守ることです。どちらも当然のことでありながらも、実際には軽視されてしまうことも少なくないと思います。もしくは、いろいろある日常を暮らすなかで希薄になってしまうのかもしれませんが。このふたつの言葉が共同研究を守ってくれていたのだと思います。そしてその結果として、誰かがみてくれていたのか、ありがたくも高宮賞を賜ることができました。

そうそう、このような良い共同研究が進んでいると、孤独の感覚も薄れていました。

奨励していただいた研究の日々はまだまだ続いていきます。みなさんとも一緒に議論しながら研究を進めていければと思っています。いろいろとあります

が、ご自愛をしながら研究を続けていきましょう。きっと、誰かがみてくれています。

(中園宏幸)

この度は高宮賞に選出いただき、ありがとうございます。私自身、このような賞をいただくことになるとは、ほんとうに夢にも思っておりませんでした。

…いや、正直に告白すれば、大学院時代には、「いつか自分も高宮賞をとってやる」などという根拠なき自信に満ち溢れていた時期もありました。ですが、そんな根拠なき自信も、リジェクトを通じて至極健全な形で打ち砕かれ、結局、大学院時代には論文掲載も叶わず、トライすることそれ自体にも次第に消極的になり、組織学会自体からも距離をおくようになりました。「このような賞をいただくことになるとは、ほんとうに夢にも思っておりませんでした」と心の底から主張する私は、このようにして出来上がりました。

そんな私にとって、2021年に酒井健先生のお誘いで「歴史的組織研究」の特集号に招待論文を掲載していただいたことと、これに関連して2022年秋の年次大会でパネル報告をしたことは大きな転機でした。ちょうど同時期に、コロナを機に繋がった社会学系・経営学系の若手研究者たち（「あいだ研」のみなさま）と色々と議論するようになったこと、そして彼らが積極的に組織学会でネットワーキングをしていることに背中を押されたこともあり、以来、研究発表大会にも年次大会にも継続的に参加するようになりました。

中園さんとはそのようなネットワーキングの過程でお会いし、幸いにも共同研究が実現しました。中園さんは他者に対する配慮を結晶化したような方ですので、共同研究を通じて私がやりたいことを忍耐をもって理解してくれましたし（彼はそれを「リスペクト」と表現しています）、逆に彼が実現したいことについても率直に伝えてくれたので、執筆はスムーズに進みました。幸いなことにそれが掲載に至り、さらには受賞に至ったわけです。

執筆過程で本当に幸いだったのが、問題意識の共有でした。歴史という「語られた事実」がもつ資源性と制約性、そしてそれを用いようとする経営者の主体性との緊張関係をどのように描くのか、ということです。知的にも、肉体的にも、社会関係的にも決してオールマイティではない我々人間主体が、それでも一瞬一瞬の局面において主体的に物事を考え、行為実践に至る緊張関係を歴史的に描き出すことは、社会学と経営学の境界をうろうろしてきた私にとっては、とても大事なことであり続けているのですが、この問題意識を高い解像度で共有できたことは、長年の孤独からの解放でもありました。

同時に、研究主体である我々研究者もまた、上述の有限性を湛えた存在であり、このことを謙遜に受け止めて、家族やパートナーとのケアの分担や社会関係の維持も大事にしていくことを互いに尊重できたことも大きかったです（彼はこれを「ご自愛」と呼びます）。

受賞ももちろんそうですが、そうした「リスペクト」と「ご自愛」を両立できる研究仲間に出会えることは、完全に個々人の研究者の力量を超えています。このような因果の連鎖に関わってくださった方々お一人お一人のお名前を書こうとすると完全に紙幅を超えてしまいますので割愛しますが、みなさまに心より感謝いたします。我々も、同じようにアカデミアで孤独に戦う研究者たちが繋がることのできる因果連鎖の一翼を担えるよう、これからも邁進して参ります。「リスペクト」と「ご自愛」を携えて。

（長谷部弘道）

【新入会員紹介】

2025年度(第21期)には、正会員103名、準会員(個人)46名、準会員(団体)1社が入会しました。また、準会員から正会員へ会員種別を変更した会員は2名、正会員から準会員への会員種別変更は、2名でした。

【総務関係】

【1】年会費納入のお願い

当学会は2025年9月1日より2026年度(第22期)に入っております。年会費として正会員の方は12,000円、準会員・個人会員の方は8,000円のご納入をお願いいたします。

ご請求内容につきましては、会員管理サイト「SMOOSY」の会員マイページにてご確認ください。

(会員管理システム (SMOOSY) : 会員マイページのご案内)

会員マイページ URL : <https://aaos.smoosy.atlas.jp/mypage/login>

ログイン ID : ご登録済のメールアドレスをご入力ください。

パスワード : ご登録済のパスワードをご入力ください。

1. ゆうちょ銀行(郵便払込取扱票)および銀行振込の方

金額等をお確かめのうえ、支払い期限（2026年8月31日）までにお支払い手続きをお願いいたします。

2. 銀行自動引落(口座振替)の方

2025年9月27日にご指定の口座から振替いたしますので、お確かめください。

お支払い手数料は当方にて負担いたします。また、口座振替入金事務手続き後にSMOOSYより領収書発行が可能となります。こちらは手続き上の関係で確認までお時間を頂戴いたしますので、確認後に会員管理サイトに「入金」より領収書発行が可能になります。

3. 請求書をお申し込みいただいた方

年会費の請求書発行につきましては、会員管理サイト「SMOOSY」の会員マイページより、随時発行可能でございます。

一部の方を除き4月に請求書の郵送はいたしませんので、ご自身で請求書発行をお願いいたします。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い会費処理等で、運営上の問題が発生しております。会員の皆様には事情をご理解いただき、何卒速やかなお支払いをお願い申し上げます。

【2】大会出席・会員総会委任状送付のお願い（オンライン会員総会の日程未決定）

2025年度組織学会年次大会では、2025年9月20日（土）に会員総会が開催されます。大会開催が従来よりも早まりましたので、別途、オンラインにて会員総会の開催を予定しております。

組織学会の重要な議決機関です。また、今回の会員総会は、特定非営利活動法人としての総会も兼ねております。特定非営利活動法人の総会開催には正会員の5分の1以上の出席が必要とされております。正会員の皆様方には、是非ともご出席いただきますようお願いいたします。

やむを得ずご欠席の場合には、学会ホームページより「委任状」をご提出くださいますようお願い申し上げます。ご欠席の可能性がある場合にも、委任状の提出をお願いいたします。委任状をお送りいただいた上で総会にご出席された場合、委任状の総数から出席人数を差し引きます。

2026年度会員総会 電子委任状送付 URL：

総会出席、ならびに委任状の送付は、すべての正会員の皆様の意向を確認するための措置です。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

【2026 年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

＝ 記 ＝

A) 英文論文の校正支援(1 件当たり 5 万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1 件当たり 5 万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において 40 歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低 2 年間は再応募できないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。
- ③ 締切は年 3 回(12 月・3 月・6 月)設けます。2026 年度は、2025 年 12 月 5 日(金)、2026 年 3 月 6 日(金)、6 月 5 日(金)を期日とします。
締切後の 1 ヶ月後を目途にお知らせいたします。
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の 17 時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から 1 年以内に投稿するこ

とが望まれます。投稿後は、受理レター（プリントアウト・コピー等でも可）を組織学会に提出してください。

- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3部）を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり 10 万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で 40 歳未満の正会員である共同研究を対象として、1 件当たり 10 万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で 40 歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望まれます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長 2 年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ⑤ 締切は年 1 回 (3 月) 設けます。2026 年度は、2026 年 3 月 13 日 (金) を期日とします。
- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から 1 年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。
- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3部）を組織学会事務局に提出してください。

【 事務局より 】

【 1 】 銀行口座自動引落（口座振替）結果状況確認について

会費の銀行口座自動引落（口座振替）自動引落は、三菱 UFJ ニコス株式会社(NICOS)の収納代行サービスを利用しております。そのため、内容確認のためにお時間をいただきますので、何卒ご了承ください。

【 2 】 会員情報の登録変更について、（会員管理システム（SMOOSY）を使用）

一昨年より会員管理システム（SMOOSY）を導入しております。会員の皆様におかれましては、会員データ登録内容（所属、住所、電話、FAX、メールアドレス等）に変更が生じた場合は、以下の URL より、会員情報の変更登録をお願いいたします。

（会員管理システム（SMOOSY）：会員マイページのご案内）

<https://aaos.smoosy.atlas.jp/mypage/login>

- ・ログイン ID：ご登録済のメールアドレスをご入力ください。
- ・パスワード：ご登録済のパスワードをご入力ください。

【 3 】 大会開催前後の連絡について

年次大会・研究発表大会の開催（土・日）において、事務局員は会議運営および諸準備のため、前日の金曜から準備にあたっております。また恐縮ながら、翌月曜日は代休日となります。その間、事務局宛の電話・FAX・メールを確認することができません。ご不便をおかけいたしますが、よろしくお願い申し上げます。

なお、次の 2026 年度組織学会年次大会（青山学院大学）は、準備の都合上、金曜日のご連絡はお受けすることができません。

組織学会通信 第 97 号

2025 年 9 月 20 日

発 行 特定非営利活動法人 組織学会
事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-5-2
三菱ビル 地下 1F 171 区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>